

聖書：ローマ 3：25～31

説教題：私たちの誇り

日時：2015年6月14日

前回、神の素晴らしい福音のメッセージが語られました。罪のために神の前で口をふさがれて、さばきに服するより他なかった私たちに、神はまさかの救いを用意してくださいました。その救いとは神の前で律法を守り、良い点数を稼いで義と認められる救いではなく、ただ神の一方的な恵みによって義と認められる救いでした。イエス・キリストを信じることを通して神の前であなたは正しいと宣言され、以後、必ず天国に入る者として、神に愛され、育まれ、きよめられて行くという救いでした。しかし本当にそんな素晴らしい話はあるのでしょうか。第一、こんな罪人を神は義と認めて、ご自身の正義は保たれるのでしょうか。絶対的に正しく聖なる神は、私たちの悪をやむやにして私たちを救うことはできません。果たして神は義なる方であるというご自身の性質を保ちつつ、私たち罪人を救うことができるのでしょうか。それが今日の箇所の関心です。

まず 25 節に「なだめの供え物」という言葉が出て来ます。ここでは何をなだめることが考えられているのでしょうか。それは神の怒りでしょう。1 章 18 節に「不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが啓示されている」とありました。この神の怒りをなだめて、神が私たちに和らいでくださるようになるためにはどうすれば良いでしょう。皆さんは誰かを怒らせたことがあるでしょうか。おそらくあるでしょう。私もあります。その時、どうしたら良いのでしょうか。もちろん自分が悪ければ率直に相手に謝ります。しかしただ一言ゴメンと謝るだけでは、誠意がうまく伝わらないかもしれません。ですからたとえば相手の家へと出向いて行く。その時、より相手の怒りをなだめるためには、手ぶらで行くよりお菓子を持って行く方が効果的かもしれません。相手が好みそうなお菓子を持って行って、謝罪の言葉とセットでお渡しすれば、相手も「まあ、仕方ないか」と言って受け取ってくれるかもしれない。そして後でお菓子を食べながら本当にその心がなだめられ、和らいでくれるということが起こるかもしれません。しかしここで言われているなだめは、そのように感情的に怒っている神に何とか落ち着いていただくための工夫をするということではありません。神の怒りは感情に支配された怒りではなく、何よりも正義と関係します。神はどんな悪に対しても怒りを持たれます。その怒りがなだめられ、静められる方法はただ一つ。それは神様の好物を差し上げるのではなく、御前にある

悪が正しくさばかれることです。神の正義が満足させられることです。ここに私たちの救いの難しさがあります。もし神が私たち罪人を罰すれば、神の正義は満足させられます。そして神の怒りはなだめられます。しかしそれでは私たちの救いはなくなってしまいます。だからと言って、罪ある私たちをただ赦してしまつたら、神の正義は保たれません。罪に対する適切な処置がなされていないこととなります。

そこで25節に「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。」とあります。ここでの「ご自身の義」とは、私たちを救う神の義のことではなく、神の正義のことです。悪はきちんとさばかなければならないとする神の正義のことです。そのために神はキリスト・イエスをなだめの供え物とされた。先ほど見たように、神の怒りをなだめるために必要なものは、お菓子とか神の好物とか賄賂ではなく、正義の実行です。つまり私たちの罪に対する神の怒りがなだめられるためには、私たちの罪に対するさばきがきちんと行なわれなければなりません。ですからキリストがなだめの供え物となられたとは、キリストが私たちに代わって私たちに下るべき罰をすべて身代わりに引き受けてくださったということです。このことを通して初めて罪に対する神の正義の怒りは静められ、その怒りは私たちから過ぎ去ることとなるのです。

そのキリストのなだめについて述べる際、「その血による」とあります。非常に生々しい言葉です。これは旧約以来のいけにえ制度を指し示す言葉です。レビ記 17 章 11 節：「肉のいのちは血の中にあるからである。・・・いのちとして贖いをするのは血である。」ヘブル書 9 章 22 節：「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」旧約時代に罪を犯した人々は、いけにえとなる動物の上に手を置き、その動物が代わりに殺されることによって罪の赦しを得るとされていました。そのためにはそこでその血が流され、いのちそのものが注ぎ出されました。まさにキリストはそのように私たちの罪のために血を流し、いのちを注ぎ出されたのです。いや旧約のいけにえの制度はすべて、このやがて神の前で尊いいのちを注ぎ出されるまことのいけにえイエス・キリストを指し示すものでした。私たち多くの人間の途方もない罪に対する神の怒りが完全に静められるためには、それ相応の途方もない犠牲が払われることが必要です。そのために何と神の御子の血が流されたのです。イエス様はへりくだって人となられて、この世で数々の苦悩と辱めを耐え忍ばれました。そして十字架上で無限の価値を持つご自身のいのちをささげられました。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」というイエス様の叫びは、イエス様が払われた犠牲がいかに大きなものであったかを示しています。これは私たちが永遠に極め尽くすことが

できない叫びです。イエス様はそうして尊いご自身の血を流し、そのいのちを注ぎ出してくださいました。イエス様はこうして神の御怒りが私たちから過ぎ去るための「なだめの供え物」となってくださいましたのです。

しかし私たちがここで勘違いしないようにすべきこと、むしろしっかり心に留めるべきことは、この神の怒りをしずめるために主導権を取ったのは誰かということです。それは私たちではありません。私たちは口をふさがれて、なす術がなく、ただうつむいていた者たちです。しばしば言われるのはイエス様がそれをしてくださいましたということです。怒っている神に対して、キリストが十字架にかかって、父なる神に「わたしがこうして身代わりになったのですから、わたしにより頼む者たちを赦してくださいね。彼らに対する怒りを静めてくださいね。」ととりなしたというものです。この場合、神は私たちに対して厳しい方である一方、イエス様は私たちの側に立って私たちを取りなしてくださいる愛のお方だということになります。そしてこのような観点から、神よりもイエス様を高く上げ、賞賛する人たちがいます。しかしそうではないのです。25 節に示されていることは、このなだめの供え物を用意されたのは神であるということです。神は確かに私たちの罪に対して怒りを持たれる正義の神です。しかし私たちが見上げるべきは、この義なる神が、同時に私たちを愛して、なだめの供え物としての御子を与えてくださいましたということです。イエス様が十字架上で「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれた時、それはどんなに測り知れない苦しみだったろうかと先に述べましたが、そのように一人子が叫ぶ姿を見る父なる神の苦悩もまたどれほどのものだったと言うべきでしょう。ある意味ではご自身がその苦しみを引き受けるよりもっと苦しいことだったでしょう。しかし聖書に示されている神は、御怒りの対象である私たちをなお愛してござって、イエス様を送ってくださいましたのです。ですから私たちの救いは、一言で言えば、この神から始まったのです。私たちに対して怒っておられる神が、私たちを愛したもうあまり、ご自身の大切な一人子さえも惜しまず私たちに与えてくださいましたのです。そしてその一人子の十字架において、ご自身の義と私たちに対する愛とを両方同時に示しておられるのです。あの十字架には「神の愛」と「神の正義」の両方が示されています。神の正義がしっかり保たれ、公に示されている中で、私たちに対する救いが提供されているのです。ですから 26 節後半にあるように、「こうして神ご自身が義であるとともに、イエスを信じる者を義とお認めになる」ということができる。ですから私たちは神がご自身の正義を守りつつ、私たちの救いを成し遂げてくださった十字架のキリストのところにこそ行って、「義と認められる」祝福に生かされるべきなのです。

続く 27～31 節には、この神の素晴らしい福音から導かれる 3 つの真理が語られています。まず一つ目は 27～28 節にある通り、「私たちの誇りは取り除かれた」ということです。私たちの救いは、すでに見て来たように、私たちの行ないによって勝ち取るものではなく、ただ神の恵みに信頼する信仰によって与えていただくものです。とするなら、もはや私たちに自分を誇る誇りはありません。どんなに人間的に素晴らしい学歴や能力や業績があっても、それが私を救ったものではありません。私はただ神の愛と恵みによって救われます。ですから私たちには誇るものはもう何もないのです。誇るものがあるとすれば、それはただ素晴らしい神様だけです。「誇る者は主を誇れ」と 1 コリントに書いてある通りです。

2 つ目の真理は 29～30 節にある通り、神の御前では人種間の優劣はないということです。ユダヤ人はともすると選民である自分たちの優位性、優越性を主張しがちでした。しかしたった今、人間には誇るべきことがないと言われました。ユダヤ人であるから異邦人より勝っているという誇りを神の前で持つことはできません。むしろ神は世界でただお一人の神なら、その神はユダヤ人の神であると同時に、異邦人の神でもあるはずで、そしてユダヤ人がただ信仰によって救われるなら、異邦人もそうです。割礼のある者もない者も、ただ恵みのゆえに、信仰を通して救われます。これがただお一人の神が、世界のすべての人に対して持つておられる、ただ一つの救いの方法なのです。

三つ目の真理は、31 節にある通り、この信仰による救いは律法を廃棄するのということなのです。「律法の行ないによらず、ただ信仰によって」と言われると、パウロは律法を捨てているようにも思われます。しかしそうでないことは、これまで見て来ました。神の救いは律法の要求を満たす形で与えられています。律法を無視していないから、イエス・キリストの身代わりが必要とされているのです。イエス様の服従の生活は「積極的服従」と「受動的服従」に分けて考えられます。積極的服従においてイエス様は律法を積極的に満たす歩みをされました。これによってご自分に信頼する者に与える完全な義を用意されました。一方の受動的服従においてイエス様は律法が要求する罪の罰を私たちの代わりに耐え忍んでくださいました。ここにおいて私たちの罪が赦されるための歩みをささげてくださいました。ですからこの信仰義認のメッセージは、律法を廃棄するどころか、むしろこれを確立するものなのです。神は律法が要求する義の基準を満たすこととセットで、私たちの救いを備えてくださったのです。

以上の箇所から今朝特に心に留めたいのは、神のなだめの教理です。私たちが感謝すべきことは、私たちの罪に対して怒っている神が同時に私たちを愛して私たちの救

いに必要なことを備えてくださったということです。神は真剣に怒っておられると同時に、私たちを本当に愛しておられる神なので、ご自身の義を保ちながら私たちを救うために、ご自身が持つ最後のカードである最愛の一人子イエス様さえも十字架の死へと渡してくださったのです。私たちは神をこのような方として見上げているでしょうか。ここまで私たちを愛し、行動してくださった方として見上げているでしょうか。神はイエス様の十字架の出来事においてはっきりと公のメッセージを示しておられます。神はそこにご自身の正義を現わしつつ、同時にこのイエスを信じる者を義と認めるといふ恵みの救いを提供しておられます。私たちはこのようにして私たちを救う道を見つけ出し、それを実行してくださった神に感謝して、十字架のイエス・キリストのもとに行くことができますように。そしてこの方を信じることによって与えられる「信仰による義」を受け取ることができますように。そういう私たちにはもはや誇るべきことは何もありません。私たちの誇りはただ神のみです。この神こそ、望みのなかった私たちをあわれみ、愛してくださったお方であり、イエス・キリストにあつてすべてのものを与えてくださる神だからです。この方こそ私たちにとっての喜びであり、永遠に賛美しても賛美し尽くすことのできない私たちのすべてなるお方、すべての愛を注ぐべきお方だからです。